

# 香取遺産

Vol.123

圓生涯学習課

☎(50)1224

江戸中期の高僧

松永吞舟の墓



▲吞舟の墓碑（写真中央）、寿蔵碑（写真左）

津宮の千佛寺境内には松永吞舟の墓碑と安永8年（1779）建立の寿蔵碑があります。墓碑には「嵯峨後学和漢両派及第松永友也源宗弼之碑」と刻まれています。

吞舟は元禄11年（1698）11月飯岡村下永井（現旭市）に生まれました。父は水谷勝国、のちの寺門与右衛門、母は俳人松永貞徳の姪でカメといいました。母は産後まもなく他界し、父も3歳の時に世を去りました。孤児となった吞舟は近隣の人にしばらく育てられていましたが、7歳の時、同地観世寺（飯岡長妙寺）の小僧に引きとられました。しかし、まもなく佐倉藩に仕えていた松永操雪を頼り、名を松永友也、字を宗弼と改めています。

9歳の時（一説に13歳）、江戸に赴いた吞舟は林家の門に入り、朱子学に精通します。その後、才覚が認められ山城（京都府）の越智氏に仕えて禄250石を与えられますが数年で辞しています。

享保12年（1727）30歳で真言宗豊山派の総本山神樂院長谷寺に入り、字を吞舟・北溟と号しました。

34歳の時、京都で和漢両派を学んだ後、全国を遍歴して学問に専心したと伝えられています。元文3年（1738）津宮村

の名主久保木太郎右衛門を訪ね、その斡旋で香取神道山根本寺の住僧となります。根本寺では、酒杯を友とし閑寂な隠遁生活を送ったといわれていますが、世事にこだわらず喜怒を表面に表さない吞舟に多くの人々が敬服したといわれています。門人には、久保木竹窓などがいます。

吞舟の著書や諸記録は相当数あったようですが、安永9年（1780）、当時としては長寿の83歳で亡くなる前に、全部焼いてしまったといわれています。そのため墓碑と寿蔵碑は吞舟を知る上で貴重なものとなっています。

昭和45年5月27日に市文化財に指定されました。